

『法隆寺と藤ノ木古墳』

歴史文化クラブ5月研修会



《法隆寺南大門前にて》

5月の研修会はいかるがの里「法隆寺」と「藤ノ木古墳」である。24日(金)9時30分にJR法隆寺駅に集合し、一路法隆寺へ向かって歩いた。当日は快晴であり、28名の会員の参加を得た。門前の松並木の参道を歩く、近頃はバスや車の参拝客が多いのであまり利用されないが中々趣のある道である。

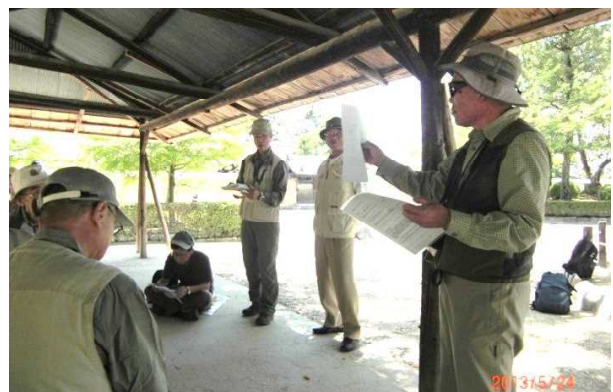
南大門前の広場で法隆寺の概要を杉本世話人より説明する。寺伝によれば推古15年(607年)に聖徳太子と推古天皇により創建とある。書紀によれば、その後天智9年(670年)に全伽藍焼失したとの記録がある。再建に関しては記録がなく、学者の間で焼けた、焼けなかったと論争になっていた。しかし、昭和14年の南大門前の若草伽藍の発掘で焼けた瓦等が出土したため、焼失後700年ごろ再建されたとの説が定説となった。

中門西の入口から入ったが、丁度修学旅行のシーズンで小・中学生が多くゆっくり見て回れなかったのが残念。金堂の釈迦三尊を始め、多くの国宝の仏像や建築物があるが、私が一番好きな仏様は「夢違観音」である。50cmほどの小さな仏像だが、実に美しく豊かな体躯である。名前の通り悪い夢を良い夢に変えてくれると言われている。法隆寺は官寺ではなく私寺で太子亡き後、山背大兄王も入鹿に滅ぼされてしまいスポンサーを失った。平安初期には衰退して寺は荒れてしまうが、太子信仰が高まり太子の徳を慕う民衆が太子講を組織し寺を支えた。

法隆寺の西には西里という地域があり宮大工の集団が住んでいる。寺の柱を良く見ると補修の跡が数多く残されている。このような匠や民衆の力で法隆寺は1300年の長きにわたり護られてきた。

江戸時代には五代将軍綱吉の母・桂昌院による多額の寄進が寺を支えた。大講堂の前に桂昌院が寄進した葵の紋入りの大 lantern がある。

夢殿を見学して、西院の休憩所で昼食をとる。昼休みの後、川井代表から聖徳太子の人物像について、古川氏より藤ノ木古墳についての話を聞く。



《藤の木古墳の説明》

法隆寺より徒歩7分のところにある藤ノ木古墳を見学する。古墳は直径50mの円墳である。法隆寺の管理下にあり中世には尼さんの庵がありお墓を守っていた。そのため、盗掘をまぬがれ1985年からの発掘調査時に金銅製の馬具や靴など豪華な副葬品(全て国宝)が発見されている。被葬者については、古墳が築造された6世紀後半という時代、貴人を葬る家型石棺、2体の成人男性の骨、豪華な副葬品から、蘇我氏と物部氏の仏教をめぐる宗教戦争で物部側の皇子として馬子に殺された穴穂部皇子と宅部皇子とみられている。しかし、穴穂部皇子と同母弟崇峻天皇であると主張する学者もいる。

古墳の見学の後、斑鳩町営の藤ノ木古墳資料館で、古墳の副葬品、石棺のレプリカや発見時の埋葬の状態の模型などを見学して、研修会は終了、資料館前にて一同解散した。資料の準備や当日の段取りなど中心となってお世話いただいた富井さん有難うございました。

(杉本 登)